

# 身体訓練法 — 狂言における「舞と謡」 —

立命館大学 中村美也

〈はじめに〉

何もない空間にたった一人、観客に向かって声を発す。逃げ出したくなるような瞬間である。能舞台に立つにはそれなりの身体を準備しておく必要がある。本研究は能楽の表現方法に関する継続研究である。前回の研究<sup>1</sup>では能楽の伝達方法である「型」と「無装置」の中に「人を引きつける方法」の存在が認められた。即ちそれは、虚構の様式を通じて観客のイマジネーションを誘い、演技世界の展開を共有するという性格のものであった。またこの様なイメージ世界への水先案内役となる「型」を演じる演者の身体準備として能、狂言双方とも世阿弥の解く二曲、即ち「舞と謡」の修得を必須としていることが分かった。

〈目的〉

『狂言に於ける舞歌の二曲の占める位置については明確な理論付けが成されておらず、能に於ける舞歌とは違った狂言独自のそれを見極める必要がある。』<sup>2</sup>この言葉を研究動機に、身体づくりという視点から台詞演技における舞謡の機能を探る。これにより表現の拠り所となる身体技術とその形式方法を明らかにしたい。

\* 「舞・謡」は狂言が有す舞と謡の総称とする。  
〈方法〉

文献から得た言葉と、演技経験者（大蔵流狂言師50～70才代4名、大蔵流稽古歴30～45年素人2名）への聞き取り調査等、これまで得た資料を活用すると共に、本研究者の稽古体験（大蔵流）も参考に加え検討する。

〈結果及び考察〉

## 1 舞謡の訓練

個人により、流派によって舞・謡への意識は一樣ではない。今回の聞き取り調査で、各人の舞謡の受容度、台詞演技との関係を聞き出した。訓練の効果に関しては個人の中でそれらが殆ど意識化されていないことが分かった。結果、全員が狂言にとって舞・謡の存在は本質的なものと認め、玄人の場合はその稽古は絶対必要であり、舞謡がマスターできていない者は狂言師とは言えないと答えた。

狂言師野村万之丞は『舞歌の呼吸訓練無しには舞台空間を一人の人間の實在感で押さえてしまう力は得られない』<sup>3</sup>と言う。狂言師の存在感はかつて野外で培った発声にある。二世茂山千作は、演技の要は腰で、腰を入れるには小舞の稽古が必須であると述べている。<sup>4</sup>一方演者からは「謡の強弱なしには台詞の鋭さは得られない、動けない」

等謡や動きや台詞のリズムに関するものが多かった。謡のリズムというのは音の強弱で作られ、この強弱リズムが台詞のアクセントとなる。台詞と謡のリズムとは一体のものとなっている。声、腰、リズムの訓練を何年も稽古している内に独自の声の調子と腰の位置が見つかり、それが演技の拠り所となるのである。

## 2 心身まるごとの稽古システム

日常生活に於いては我々の息使い（呼吸）と立ち振る舞い（動き）は常に一体のものである。が、一端舞台に立つと動きと気持ちがバラバラになる。役を演じるに当たって一番難しいと思われるのは、演技意識なしに動きと台詞が一体化し、その役のこころのままに体が動くことである。舞謡によって身につけた台詞のリズムは動きのリズムとなり、その感覚を頼りに演じている内に、無意識にその役者独自の息づかいや立ち振る舞い、即ち偽りのない感情（心）が現れ出てくる、というシステムになっている。これは心と体を繋ぐ呼吸の訓練、心身まるごとの稽古システムと言える。

## 3 身体感覚の訓練

70歳代の演者は、50才の息子の芸をまだまだだと言う。それは台詞リズムの指摘だった。高齢になって初めて到達できるような技能、それを演出家鈴木忠志は、体力の問題ではなく身体感覚の問題であるとしており、身体というものは無意識の内に日常的慣習にどんどん慣らされてしまい、年齢を重ねるごとに忘れられていく身体感覚を引きだし遊び表現しようとしてもそれは次第に難しくなってゆく、それ故訓練というものを持たない身体は持続性という点で決定的な欠陥を持つと言う。<sup>5</sup>更に舞謡を『身体感覚の遊びである』<sup>6</sup>としているが、まさに狂言に於ける訓練法としての舞謡の存在は、身体感覚を如何に遊ばせ持続させることを狙う方法論と言えよう。

〈おわりに〉

演者の座右の銘は「観客と共に」であった。彼らの稽古は全て観客のためにあるのだ。その生命観あふれる声と姿の中に、かつて舞謡や音楽をこよなく愛した民衆に、命がけで答えようとした強くそして優しい芸能者の姿を見るようである。

〔注〕及び主たる参考文献・資料

- 注1 舞謡における「劇場」的空間の変遷 遠藤保子編 1997年度(財)水野スポーツ振興会研究成果報告書 1998年  
及び 能楽に於ける型と無装置の時空間 身体運動文化研究第6巻 第一号掲載1999年3月
- 注2 能と狂言 伝統と現代3 観世栄夫編 学芸書林 1970年 P.81
- 注3 能と狂言 伝統と現代3 観世栄夫編 学芸書林 1970年 P.81
- 注4 日本度芸談3 狂言文楽 喜多六平太他 九芸出版 昭和53年 P.149
- 注5 演劇とは何か 鈴木忠志 岩波新書 1998年 P.90～92
- 注6 演劇とは何か 鈴木忠志 岩波新書 1998年 P.96  
岩波講座狂言への道 六世野村万蔵 日本と諸センター 1999年  
能狂言V 狂言の世界 小山弘志 岩波書店 1987年  
狂言ってどんな芝居 芝山千之丞 日本放送出版協会 1999年  
演劇論講座4 演劇論 津上忠他 汐文社 1977年